

劔仁美の道徳科（第5学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

目の前の子どもは、今後ますます変化が激しく、一段と国際化が進む社会を生きていくことになる。このような社会では、価値観(感じ方, 考え方)のさらなる多様化が進み、多様な価値観の中からの確に判断する能力(道徳的判断力)と、主体的に行動する意欲・態度(道徳的実践意欲と態度)が求められる。このような社会を生き抜くための資質・能力を育成するために、文部科学省は「特別の教科 道徳」(以下, 道徳科)を設置した。

子どもは、自分なりの一面的な見方や考え方で物事を見て満足したり、自分とは異なる見方や考え方の存在に気付いていても自分の考えに固執したりする傾向がある。実生活においては、同じ事象でも立場や状況によって見方が異なったり、複数の道徳的価値が対立し、単一の道徳的価値だけでは判断が困難な状況に遭遇したりすることも多い。子どもには、一面的な見方や考え方でなく、物事を広い視野から多面的・多角的にとらえ、よりよく生きるための力を身に付けさせる必要があるのである。

そこで、私は**物事を多面的・多角的にとらえ、自己の生き方についての考えを深める子ども**を目指す。「自己の生き方についての考えを深める」とは、自分のこれまでの生き方を見つめ直し、これからの生き方について表現していこうとする思いや願いをもつことである。目指す子どもを具現するためには、他者と対話、議論しつつ問題解決する中で、新たな考えを発見したり創造したりする問題解決的な学習を行うことが必要となる。道徳科の問題解決的な学習のポイントは次の二つである。

1 子ども自身が道徳上の問題に主体的に取り組むこと

例えば、「一つの道徳的価値についてこれまでの経験を基に考え、よりよい行為を考えること」である。行為だけを前面に出すのではなく、行為を取る理由に道徳的価値があるため理由を重視して取り上げる。また、「寛大な心をもって他人の過ちを許す(相互理解, 寛容)」立場と「法やきまりへの勝手気ままに自分勝手な反発を許さない(規則の順守)」立場で対立している問題を取り上げることである。従来の道徳授業のように、場面ごとに登場人物の気持ちを考えさせるのではなく「何が問題なのか」「どのような考え(価値観)が対立しているのか」を考察させる。

2 子ども自身が道徳上の問題について「登場人物はどうするべきか」「自分ならどうするか」「人としてどうするべきか」を十分に議論すること

例えば、「相手の立場から考えると、この解決策は公正・公平なのかと可逆性を追求すること」である。これにより子どもは、一面的な見方から多面的な見方ができるようになり、自己中心的な見方から公共的な見方ができるようになる。

以上のポイントを踏まえ、働き掛けを構想し、目指す姿を具現していく。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○道徳的価値	○道徳的判断力 (それぞれの場面において善悪を判断する能力)	○道徳的心情 (善を行うことを喜び、悪を憎む感情のこと) ○道徳的実践意欲と態度 (道徳的心情や道徳的判断力によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性)

3 主張する働き掛け

子どもは、自分の生活経験から自分なりの価値観をもっている。教材の場面に出合ったとき、どのような道徳的価値を基に判断しているのか(C0)を表出させるために、働き掛け1を行う。

C0の状態を表出させるのは、子どもに今の自分を自覚させ、話し合いを通して考えが深まったことを自覚させるためである。

働き掛け1

教材文を提示し、自分だったらどうするか問う。

個々の価値観を表出させるための働き掛けである。教材文をレゴブロックで状況の再現しながら読み聞かせる。レゴブロックで状況を再現することで、子どもは教材の場面を空間として把握することができる。これにより、登場人物の置かれている状況を学級全体で共有することができる。教材の場面は、子どもが生活の中で経験したことがあるような場面を設定する。教材文を読み聞か

せた後に、「自分がだったらどうするか」と問い理由とともに考えさせる。自己とのかかわりで考えさせるためである。考えは、ノートに記述させる。子どもは、道徳的価値に基づく個々の価値観(①知識・理解)(C0)を記述する。自分の立場を明確にさせるために、どのような行為を取ろうと考えたのか、ネームプレートを黒板に貼らせ、行為を理由を発表させる。行為と理由は、分類して板書する。子どもは、自分が考える行為と理由以外にも別の行為と理由があることに気付く。ただ、この時点では自分が考える行為と理由以外の考えがあることには気付いているものの、それぞれの行為の裏にある道徳的価値については考えていない。

働き掛け2

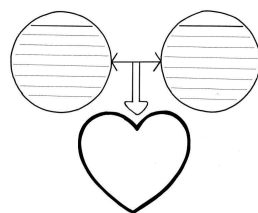
子どもから出てきた行為と理由を基に、本時で向かわせたい道徳的価値に焦点付ける。

問いをもたせるための働き掛けである。価値観を表出した子どもに、理由に隠されている道徳的価値の共通点に気付かせる。働き掛け1で表出された理由から、本時で学ばせたい道徳的価値に目を向けさせるために「何だかおかしくないですか」と問い掛ける。子どもは、何がおかしいのだろうとそれぞれの行為と理由を比較したり関係付けたりする。そして、理由として出ている、道徳的価値に関係する部分に線を引く。すると子どもは、共通点に気付く、行為は違うのに理由が同じであることに疑問をもつ。共通点に気付いたり、「なぜだろう」「どうしてだろう」というつぶやきをした子どもを問いをもった姿とする。

働き掛け3

「どうすることがよりよいのか」と問う。

よりよい行為を見いださせるための働き掛けである。問いをもった子どもに、「どうすることがよりよいのか」と問う。子どもは、行為と理由を「見いだシート」に記入し「相反する行為が出ている。どうすることがよいのか」と考える。ここでは、4～5人のグループで考えさせる。多様な価値観に触れさせるためである。子どもは一人一人の考えを聴きながらよりよい行為に向けて考える(④協働性)。このときの子どもは、場面を多面的・多角的に見て、登場人物が置かれている状況と気持ちや友達の考えなど関連させながらよりよい行為を考えている。考えたことは「見いだシート」に整理させる(⑤ツール活用能力)。「見いだシート」とは、相反する行為や理由を比較・関係付けできるように記述した新たな行為や理由を見いださせるためのツールである。次に、各グループで話し合う時間を設定した後、発表させる。子どもは共通点から行為と理由を発表する(②思考力・判断力・表現力)。ここでは、学級全体の納得解に導けるようにするが、必ずしも「この行為が一番よい」という優劣はつけない。行為を取る理由に目を向けて考えさせたいからである。



働き掛け4

「自分だったらどうするか」再度問い、行為と理由を記述させる。

資質・能力を発揮したことで、よりよい生き方に向けて考えることができたことを自覚させるための働き掛けである。よりよい行為を見いだした子どもに、働き掛け1の場面と同様の場面になったら「自分だったらどうするか」と再度問う。子どもは、自分の価値観とこれまで話し合ったことを比較したり関係付けたりして考える。行為や理由が変わった子どもは、変わった理由を記述させる。子どもは理由に「これまでの自分」と「これからの自分」についての記述をする(②思考力・判断力・表現力, ③態度)。こうして、物事を多面的・多角的にとらえ、自己の生き方についての考えを深める子ども(Cn)になる。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した見方・考え方を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。
- ④ 子どもは発揮した資質・能力を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、行為や理由を記述し、「働き掛け1での自分の価値観」と「これからの自分」についての記述があるかどうかをノート記述から判断する。
- ② 働き掛け4を受けて、友達と話し合ったことを活かして行為や理由を考えているかをワークシート記述から判断する。
- ③ すべての働き掛けにおいて、想定した資質・能力を発揮したかどうかを、実際の子どもの発言やノートから判断する。
- ④ 働き掛け4を受けて、発揮した資質・能力を自覚したかどうかを、発言やノートの記述から判断する。

5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月) 「同じ言葉でも」信頼, 友情(1時間)
- (2) 中間検討会 (9月) 「本当の友達なら…」信頼, 友情(1時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「それなら、どうする？」親切, 思いやり(2時間)